

講演一 律令国家と古代山城

講演者紹介

荒木 敏夫（あらかき としお）

早稲田大学教育学部 卒業。愛知教育大学講師、助教授を経て、一九八七年専修大学文学部教授。

二〇〇二年～二〇一〇年まで文学部長・副学長を歴任。専門は日本古代史。

・講演一 「律令国家と古代山城」

荒木 敏夫 （専修大学教授）

はじめに

ご紹介いただきました、専修大学の荒木でございます。

私は、主として文献から、この鞠智城ができる歴史的背景と鞠智城の遺跡としての「終焉」をお話したいと思っています。とりわけ、留意したいのは、本日の最後に述べることですが、鞠智城が本来果たすべき役割を終えてもなお時代、時代によって刻印される鞠智城の機能であります。こうしたことを申しあげるのは、地域の歴史を考える時、こうした視点は、極めて重要と考えるからであります。

一、七世紀（後半）の古代日本と鞠智城の築造

『続日本紀』文武二年（六九八）五月条に、「大野城・基肆城・鞠智城の三城を繕治する」という記事があります。これが、文献史料にみえる「鞠智城」の初見史料です。鞠智城の他に二城に修理を施したことを知らせる史料です。

鞠智城のような古代の山城の分布は、九州、そして西日本に点在しています。かつては、これらを朝鮮式山城



写真4 荒木敏夫氏

といたり、神籠石といたりしておりました。本日は「古代（の）山城」で統一して、この鞠智城のできる七世紀後半がどういう時代状況・時代背景であるかを、まず、お話しします。

皇極女帝が重祚して斉明女帝（在位・六五五年～六六一年）の即位する七世紀後半は、東アジアに、百済滅亡、そして白村江の戦い、高句麗の滅亡という大きな変動がありました。西日本から九州にかけて、古代山城が築造される契機は、この時期であるというのが、大方の一致する見方です。

この白村江の戦い、国内ではなく国外に出て行った大がかりな戦争です。戦争は、「王事^{わうじ}」と理解する考えがあるように、究極的には王自らが戦争に赴く（親征）形式が基本的なものです。

斉明女帝は斉明七年（六六一）に亡くなっていますから、天智二年（六六三）八月の白村江の戦の大敗は、中大兄皇子（葛城皇子・後の天智天皇）が、最高指揮官であったとみなければなりません。斉明天皇が亡くなって、戦争を中止することもできなくなかったが、中大兄皇子は、戦争に突き進んでいき、遂には、壊滅的な打撃を蒙っています。

白村江の戦いは、その前段階からみれば、斉明女帝の戦争として位置づけられる戦争となります。

『日本書紀』の「斉明紀」の記述で、留意すべき点を一点だけ押さえておきたいと思っています。

白村江の戦いは、倭国が久方ぶりに大量の兵士を外に送り出した戦争でした。そういう戦争のきっかけを作ったのが、斉明女帝です。

斉明女帝の「斉明紀」は、『日本書紀』に編纂者によって多く手が加えられており、ある種のストーリーがあると考えられています。私は、そのストーリーを次のようにみています。

「斉明紀」は、「鬼神に魅入られた女帝の話」とみると、「斉明紀」の全体が理解できます。

まず、「斉明紀」は、その冒頭に近いところで、奇妙な話を載せています。それは、空中に、龍に乗っている者がいて、顔かたちが「唐人に似た」、異国の人です。その唐人が青き油の笠を着て、葛城の峰より生駒に向かって北上し、生駒からは西に走って、住之江へ飛んでいる。関西の地理を、少し思い起こしていただければ、奈良県の南部の葛城から北の生駒へ行き、さらに生駒の西に行くと、住吉神社のある住吉です。さらに、この龍に乗っていた者は、住之江から一気に西に向かって行った、との話である。

こうした話を「斉明紀」の冒頭近くに置く一方で、その最後に近いところでは、齐明天皇の葬儀の話が置かれています。それは、斉明が死んで、皇太子の中太兄が仮の葬儀を朝倉でやっていたところ、その夕方に、朝倉山の山上に大きな笠を付けた鬼がその仮の葬儀の模様をじっと見ていた、という。

この鬼と先の異人は、イコールの関係で結べます。斉明の死を予感して、異人・鬼神は西の筑紫の地（福岡県）へ先に飛んで待っている。斉明は、福岡の地で「おいでおいで」の手招きをしている異人・鬼神に引き寄せられるかのごとくに、筑紫の地に着き、筑紫朝倉の地で亡くなってしまふ。「斉明紀」に記された斉明女帝の話は、

天皇が外地で死ぬという、非常に珍しい話になっています。

二、「白村江敗戦後」の倭国・中大兄「称制」下の非常時の王権・

中大兄は、筑紫朝倉で斉明天帝の仮の葬儀を行いました。が、直ぐに次の大王に即位できませんでした。中大兄の即位は、天智七年（六六八）です。で、斉明天皇の死後からこの時までの間、天皇位（厳密には「大王位」ですが、煩瑣になるので、「天皇」で話を進めます）は空位です。この間、中大兄は「素服称制」で事態に対応します。これは、「素服」（日常普段の服）で、戦時中でもあるので、わざわざ喪服のような特別の服を着ることなく、「称制」（大王の代行）をおこなった、ということです。注目してよいのは、この時期に、多くの所で山城が造られているのです。

さらに、中大兄が「水表之軍政」をとったとありますが、白村江近海での海戦を想定して、特別に書き表したものと考えられます。

天智二年（六六三）八月の白村江の戦いは、大敗を喫しますが、その理由についても、中国海軍を侮っていた、準備不足など、いろいろな点が挙げられていますが、負けた事実は変わるものでありません。

『日本書紀』天智三年（六六四）一二月条は、「対馬、^{とらふ}壱岐に防人と烽を置き、大宰府に水城を築く」と記している。これもまた、その年次に大きな誤りがなければ、中大兄の称制下の政策と捉える必要があります。

中大兄がまだ天智天皇になる前の大王代行の段階ですが、天智四年（六六五）、白村江での敗戦後、倭国がど

のような対応をしていたかをうかがえる記事が「天智紀」にあります。

「天智紀」は、実録的な記事が多く、信憑性の高い記事も多いのですが、『日本書紀』編纂段階での錯誤か、同じことを二箇所に書いたり（重出記事）、文章に混乱が見られたりする箇所があります。

そうした「天智紀」の記事の中で、戦勝国の唐と新羅の動きで、特記すべき記事がいくつかあります。

その一つが、天智四年（六六五）、唐国が、劉徳高・百濟禰軍・郭務儼らの一団二五四人を倭国に送ってきた、とする記載であります。ずいぶん大規模な人数の来倭です。

同じく天智四年には、一二月に筑紫に大野城、基肄城を築いております。先程の鞠智城を含む三城の事との関係から行けば、少なくとも鞠智城は、ほぼ同時竣工着工というふうに見てよいと思います。発掘調査でその事実を否定するような資料も出ておりません。このようなことから、おそらく天智四年（六六五）、少なくとも創建の時期はこの辺りに求めてよろしいものと思います。

劉徳高らが帰国する時、劉徳高らを送る使いとして、遣唐使を派遣しています。それを物語るのが、この年、守君大石を大唐に遣わすという『日本書紀』の記述です。

さらに近年驚くべきことに、・厳密に言うところ二年前ですが、、『日本書紀』に出てきていた人物である禰軍、百濟系の中国人の墓誌が発見されています。墓誌には、「日本」という文字が書いてありました。「日本」と刻した国号を示す非常に古い資料が出てきたということで、日本の学界でも大変喜びました。ところが、この「日本」は国号の「日本」ではなく、「日（ひ）の本（もと）」というような意味で、orient、東方の、という意味

であろうということが改めて指摘されています。

逆にはつきりしてきたのが、禰軍の墓誌の発見によつて、七世紀第三四半期にまでに遡つて、どうやら我が国は「日本」と呼ぶということではなかった、ということが言えるようになりました。これは禰軍墓誌の「日本」が、百済のことをさしているように、唐から見て東のほうの人達を、日本語でいう「日の本」の意味で捉えて、唐では「日本」という語句を使つていたようです。中国の初唐の頃の漢詩文の中にも、同趣の用例のあることが指摘されています。

これは、「日本」の国号が、どのような経緯で使用されるようになったかを考える上で大変貴重な金石文資料となると思えます。

天智が正式に即位して四年後の天智一〇年（六七二）、もう天智は即位していますが、この時の「使節等」は二〇〇〇人です。通常『日本書紀』を扱う時には、あまり数字の細かいところはこだわらないのが通例ですが、この記事の二〇〇〇という数字には大きな意味があると思えます。唐国使人の郭務悰が来倭した目的は、大量の人員が、多くの船で行くと、倭国を攻めるために来たと誤解されると困るので、大量の人のいくことを予め都に知らせてくれと伝えるためです。

沢山の船団を組んで、この場合は七隻ですが、大量の人が倭国に来ており、その中には、捕虜になった者、その他百済の難民なども、連れてきたのではないかと推測されています。戦勝国の唐とのやり取りの中で、捕虜の交換から始まって、おそらく倭国の使者も彼の地に行つて、戦後の処理をどうするかに対応しております。

こうした交渉が行われている一方で、他方では、非常時の戦争に備えて城造りをしている、というのがこの頃の実情です。

白村江の戦いで捕虜となって戻ってこられなかった倭国兵もいることは、『日本靈異記』（にほんりようき）に載せる説話からもよく知られた事実です。

中大兄は、天智六年（六六七）、近江に遷都します。大和の高安城、讃岐の屋嶋城も築かれますが、天智六年に即位ですから、これも中大兄称制下の造築となります。この頃には、鞠智城も造られております。

白村江には九州の人達が相当数、国造の指揮する軍隊（国造軍）に兵士として徴発されて、従軍したはずです。そうした兵士らも戻ってきております。こうした条件も整う中で、防衛体制の一環として、防衛施設である山城ができ、水城ができるのです。

唐国が襲ってくるであろうという、強い確信。その確信は、最高の軍事指揮官であった斉明女帝が亡くなって、全軍の指揮官としてのリーダーシップを取らねばならなくなった中大兄が、最も強くもっていたものと考えられます。万が一、攻めてきたならば、という想定のもとに、比較的短期間で山城ができていったのではないでしょうか。

そしてもう一つ、負けた倭国は、中大兄が必死になって唐や新羅と交渉をしていたことを先に述べました。これは、敗戦という非常に不利な外交条件で行う交渉ですから、展開次第ではとてもない悲劇をさらにもたらし

ところが、東アジアの国際情勢は、倭国にとって不利な外交条件を転換させる事態が天智七年（六六八）におきます。高句麗の滅亡です。これによって、朝鮮半島の領有をどうするのかということで新羅と唐とに意見のずれが生じます。

『日本書紀』によれば、天智七年九月この時、新羅が六五六年以来、倭国王に形式上、臣下の礼を取って出す貢ぎ物である「調」^{みつぎもの}を持って来ました。これは、新羅が高句麗滅亡後の朝鮮半島の領有を有利に進めるための外交で、倭国と手を結ぶための外交とみることが出来ます。

新羅は、六六五年に泉蓋蘇文^{いんがいそぶん}が亡くなった時点で、高句麗の瓦解を見通していたと思いますが、この年、即位した天智に、わざわざ貢物である「調」という形式で持ってきたことになりました。新羅は、時に、こういう対等の関係でない屈辱的な外交を新羅の国内・国際条件を加味して使い分けてきました。そうした新羅の外交からすると、非常にこれは一步も二歩もへりくだった対応になります。その理由として、結局、半島の支配を、中国に任せるのか、自国でやるのかに関わり、この点をめぐって、唐と新羅の対立が深まったため、こうした外交をとらせたものと思えます。

唐は一旦安東都護府^{あんとうとごふ}を平壤に置きますが、後に遼東に移します。その一方で、新羅の文武王が唐国や倭国への巧みな外交を仕掛けながら、半島の統一を本格化させます。そして、こうした外交政策が功を奏し、天武五年（六七六）頃には、事実上、唐も新羅の半島支配を認めることになり、新羅による半島の統一が完成します。これは、都護府を設置し、地方支配を行う唐国の東アジア支配の政策が、頓挫したことを意味します。

六七二年に王位をめぐる争い、壬申の乱が起こります。これは綱渡りの外交というものの、一応の外交のめどもそれなりに立ってきていればこそ生じた内紛です。天武が、王位継承の争いで、天智から大友皇子に継承される王位を篡奪するわけですが、わずか数か月で終わった内乱とはいえ、内乱をしている時間など普通ならばなかったのにも関わらず、内乱をおこせたのも、それなりに前の段階で一定程度の外交上の見通しが立っていたからだと思います。

持統女帝の時に、飛鳥浄御原令ができあがり、都も飛鳥の地から藤原に地に遷都され、段々と本格的な、古代国家・律令王権ができてきます。

文武は、六九七年に即位します。その翌年の文武二年（六九八）五月に鞠智城などが、「三城繕治」とあります。繕い治すという意味になります。ですから、鞠智城は当然この前の段階にできていなければならないわけです。

「繕治」の記事で感じるのは、山城を造るのも大変なわけですが、維持、管理していくことはもつと大変です、ということですね。『報告書』によれば、鞠智城は何期かに分けられるということですが、一〇世紀半ば以降、大体つまり第五期に当たる段階になってくると、さすがに活動は終息するようです。修理というのは、必要だからこそ修理をするわけです。

おそらく称制下の中大兄は、相当な勢いで命令を発して、また強い命令を下して造らせたいと思います。そうではないと、称制下の時期に大王の権力が、あそこまで達しているということは、おそらく各地域の豪族の協力を強

く要請したからです。その要請の中でなんとか都までの防衛ラインを固めることができたわけですが、問題はいつまでも臨戦態勢にあるわけではないということです。一時的に緩めた体制をとつても、そのまま緩めたままではないことが、九州の大野、基肄、そして鞠智、この三つの城の繕治の記事から読み取れます。そして九州だけではなく、高安城の修理も行なっていることにも留意すると、この時の「修理」が、「緊張感」を秘めたものと考えられることもできます。それは、遣唐使を派遣していない唐との外交の空白期が、もたらした国際関係の理解の浅さ・不案内によるものとも考えられ、この点にも目を向けておく必要があると思います。

白村江の敗戦で、もう一つ留意したい点があります。日本の八世紀以前は、あまり注目されていませんが、大量の兵士が海を渡っています。海外派兵の歴史というのは八世紀以前の段階は規模の小さい例も含めれば、決して少なくないということです。これは、日本の古代史を考える上で、また対外関係を考える上で知っておかなければならない事実です。白村江以降、海外派兵は、極めて稀になってきます。

海外派兵という事実は、古代史に関係ないと思われがちですが、白村江だけでなく、それ以前の段階でも、いざという時にはありました。そうした時の軍隊を『日本書紀』は「救軍」と記しています。倭国が、勝手に称しているだけではなくて、おそらく朝鮮三国との関係の中で、「救軍」と呼ばれていたと思います。救軍は、招聘する側の、例えば、百濟、任那（みまな）（伽耶諸国）のような国からすれば、まさにこの言葉に相応しいものでした。そして、こういう「救軍」としての派兵が、欽明天皇の時代にあたる六世紀から七世紀にかけてみられ、また、「救軍」という語句は、八世紀に入っても使用されたようで、七六六年の百濟王敬福（こうふく）の薨伝（こうでん）に出てきます。

「救軍」は、朝鮮三国や伽耶間の抗争の時に、倭国軍として肩入れしますが、多くの場合はおそらく筑紫、太宰、九州に駐留します。崇峻が殺された時の話で、内の乱れ、天皇が殺されても九州の兵隊を動かしてはいけないとあります。なぜかという、外からの守りの為、目的がはっきりしているのだということです、このような筑紫の兵の性格は、救軍という役割がありました。

むすびに代えて、鞠智城が象徴するもの

白村江の大敗から受けた危機感に煽られる中で造られた鞠智城は、一〇世紀で役割を終えます。

そこにいたる以前の九世紀の中頃、当初の期待された鞠智城の機能とは、異なるものが史料からうかがえる。それを示すのが、『文徳實録』天安二年（八五八）閏二月二十四日条の「肥後国言す。菊池城の院の兵庫の鼓、自ら鳴る」とする記事と同年六月二〇日条にも「肥後国菊池城の院の兵庫の鼓、自ら鳴る」とする記事である。

いずれも「兵庫の鼓自ら鳴る」と記されています。この「兵庫の鳴動」と言われるのは、政治・世の中の異変を知らせる鳴動です。この鳴動が、ストレートに予見したわけではないが、その後の天変地異を予兆する一つとして、鞠智城の兵庫が鳴ったと考えられます。阿蘇の大爆発が、その十数年後に起きます。貞観の大爆発です。

東北の貞観の大津波、そして鳥海山の爆発。それに連動して、京都、そして阿蘇も爆発を起こしますが、そういう大きな揺れの中で、実際に日本の歴史は、大きな変化を生み出しています。清和天皇・陽成天皇など幼帝の即位、藤原良房・基経らによる「摂関体制」の構築は、天変地異の頻発する社会不安の高まりを背景にして生まれ

たものです。

こうした状況下で鞠智城が「鳴動」をしていることの意味は、重要です。当初、七世紀後半に外からの危機に備え築造した鞠智城の兵庫が、九世紀に「鳴動」する。それは九世紀中葉に至ってもなお、鞠智城が「動く」、この場合は、予兆としての「鳴動」ですが、と、肥後の人々に何かを訴えるだけでなく、京の天皇・貴族らも耳を傾けざるをえない影響力をもっていることを意味します。この点のより深い検討が望まれるところです。

鞠智城があつたこの地は、山城のあつた軍事的拠点でありますが、時代の変化とともに他の歴史的な意味を持つようになります。

その一つに、鞠智城内で沢山の建物群が出たところを長者原ちやうじやまと言っております。地名が語る歴史の痕跡は、「長者原」にも残っており、国が大がかりで造った公的施設の衰退した跡地に「長者伝説」の残っている割合は少ないです。

鞠智城の地にも、「長者原」の名が残り、なおかつ長者伝説等が地元に伝わっています。失われていく部分があるのは、やむを得ないにしても、「長者伝説」が今でも残っている点は、鞠智城の地の重要性を考える時、もっと、大切にされてよいものと考えます。

史跡というものは、特定の時代の特定の機能に絞って評価していくことが必要であるが、地域の歴史にとつては、特定の、例えば古代・時代だけでなく、その後の時代においてもその在り方に注意を払って考えていくことが重要です。幸いなことに鞠智城跡は国の指定にもなっており、そして公園化がどんどん進んできており、現在、

学術的な調査も進んでいます。

それがなお進んでいく中で、あの地のもつ多様な歴史的意味がもっと明らかになってくることを期待しています。どうもありがとうございます。